

明治期の唱歌歌詞における「日本の美」：季語とナショナル・アイデンティティ

佐藤，慶治
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1955349>

出版情報：総合文化学論輯. 2, pp.35-52, 2015-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：

明治期の唱歌歌詞における「日本の美」 -季語とナショナル・アイデンティティ-

佐藤 慶治

1. 導入と本研究の目的・意義・対象

現在、日本の学習指導要領において、「音楽」は教科の一つとして定められ、その共通教材には《春の小川》や《富士山》など、「日本の自然」を歌った戦前の「文部省唱歌」が多く含まれている。これは戦前の音楽文化が現代に受け継がれているとも見なせるが、本論文は「季語」をキーワードとして、明治期の唱歌教育における文化的アイデンティティの創出について論じるものである。初めに「唱歌」の概説を纏めたい。

日本における「音楽」教科の最初期については1872年、近代的学校制度を定めた日本最初の教育法令である「学制」が公布された際に、小学校の一教科としての「唱歌」が定められた。これは教科書や実際の指導者もなく、「当分之ヲ欠ク」という注付がなされており、有名無実な教科であったと言えるが、文部省は1879年に音楽取調掛を創設し、米国留学時代に音楽教育についても学んでいた官僚の伊澤修二を掛長に任命する。伊澤は1880年、米国留学時代の自身の師であったルーサー・ホワイティング・メーソンを音楽取調掛における指導者として日本に招聘し、1881年から1884年にかけて、わが国最初の音楽教科書である『小学唱歌集』全三編を発行する。『小学唱歌集』は全三編において全91曲の楽曲を掲載しているが、そのうちの81曲が外国語楽曲に日本語の歌詞をつけた所謂「翻訳唱歌」と呼ばれるものであり¹『小学唱歌集』の場合、主に英米とドイツの民謡や歌曲・賛美歌、さらにはメーソンの編纂した児童用音楽教材集である『国楽大系』*National Music Charts*の楽曲を原曲としている。この「翻訳唱歌」の歌詞に関しては「原曲の歌詞を翻訳し、次いで曲を分解して、日本の伝統的な詩の形式に従って作詞しやすくした上で、分解した曲に合わせて歌詞の修正を加えた」とされている²。すなわち、翻訳と言っても必ずしも正確な翻訳ではなく、例えばキリスト教の神を讃える賛美歌が、大まかな歌詞のストーリーはそのままに天皇を讃える歌詞に置き換わっているなど、日本の文脈に合わせた広義の「翻訳」が行われている場合や、もしくは元々の歌詞内容を全く無視したものさえある。

唱歌教育におけるこの「翻訳唱歌」は、『小学唱歌集』の発行より、全楽曲が

日本人によって作曲された1910年の『尋常小学読本唱歌』、それを引き継ぐ形で1911年から1914年にかけて編纂された『尋常小学唱歌』が登場するまでの期間に数多く作られる。その「翻訳唱歌期」とでも呼ぶべき期間は、日清・日露戦争を通じ、「日本」という国民国家がひとまず形になってきた時期とも重なるが、唱歌教育はナショナル・アイデンティティの創出や徳育、すなわち「国民づくり」と呼ばれるような役割を担い、インフラや経済政策と共に、積極的な整備が行われている。ここで大事なことは、明治時代初期に国際社会で欧米列強と対峙することを迫られた「日本」という新しい国家にとって、「日本」を近代的な国民国家に造り替えること、つまりはベネディクト・アンダーソンの言うような、「想像の共同体」を創り上げることが早急な課題であったということである。教育学者の唐澤富太郎の歌詞内容分析によると³、『小学唱歌集』全91曲のうち52曲の歌詞が、「忠君愛国的」もしくは儒教に基づいた「教訓的」内容を持っているが、それは日本で独自に作られたものだけではなく、前述の天皇を讃える歌詞の例のように、日本の社会的状況に合わせた内容の改変、一言で言えば「翻案」で作られているものも多い。この唐澤の分析においては、『小学唱歌集』全91曲のうち34曲が「自然」に関する歌詞内容とされているが、前述の「国民づくり」と一線を画するような評価を受けている⁴。しかしこれは正しい評価だろうか。唐澤は、『小学唱歌集』編纂当時の状況について、「教科書が強力な影響を与えるように進められ、政府の教育意図がより明確になるようになった」と分析しているが⁵、このことに鑑みれば、「自然」に関する34曲も、当然、「国民づくり」の意図の下にあったのだろう。例えば比較文化学者である西川長夫の国民国家に関する研究において⁶、国民国家を擬制的共同体として国民に受け入れさせるためには、それを受け入れる側の文化的な共通認識の前提が必要であるとされている。この視点に立つならば、「自然」をテーマとした唱歌は、「歌」という装置を利用することによって、国民間の文化的な共通認識を高め、学校教育における「国民づくり」に一役買ったと言えるのではなかろうか。

本研究は上記の疑問に基づいて、明治期の唱歌教育に関する考察を行うものであるが、本研究の目的としては第一に、明治期における文化的な共通認識、すなわち「日本の美」という概念が、唱歌によって国民に浸透した過程を分析するということがある。第2章では、「日本の美」という概念が「自然」というテーマを背景にしたものであることを論じるが、その概念の基礎は、江戸時代に既に存在していたものであった。第3章では『小学唱歌集』がその基礎、すなわち「季語」を基に形成されたものであるということ、歌詞内容の比較分析を通じて論じる。第4章では、「翻訳唱歌期」に編纂されたいくつかの民間製唱歌集を取り上げ、「自然」をテーマとした唱歌歌詞様式の変遷を見る。第5章で

は全体のまとめとして『尋常小学唱歌』を取り上げ、その内容を『小学唱歌集』と比較する形で論じる。本研究の意義としては、明治時代、どのような素材・過程によって文化的アイデンティティが創出されたかを解明できることが挙げられるが、それはこの時期の唱歌教育が期待されていた役割を明らかにすることにも繋がる。本研究においては、「国民づくり」という考えの性質上、主として当時の義務教育であった小学校向けの教科書を扱う。

2. 「自然」と「日本の美」

1968年、川端康成はストックホルムにおけるノーベル文学賞受賞講演の場で、「美しい日本の私」と題し、自分の作品が「四季の美を歌ひながら、実は強く禅に通じた」⁷ものであるという宣言を行った。また川端は、「日本美術の特質は、雪月花の時、最も友を思ふという詩語に約められる」という美術史家の矢代幸雄による言説を引用し、「雪月花という四季の移りの折り折りの美を現はす言葉は、日本においては山川草木、森羅万象、自然のすべて、そして人間感情をも含めての、美を現はす言葉」⁸であるとして、「日本の美」と自然との密接な結びつきを指摘している。この「四季の美」と「雪月花」⁹というキーワードに関しては、詳しい分析は次章で行うが、『小学唱歌集』における「自然」をテーマとした唱歌とも密接な関わりを持つ。

この他にも「日本の美」と自然との結びつきに関しては多くの人物が指摘を行っている。例えば前述の矢代は『日本美術の特質』の中で、日本美術の特徴を「印象性」・「装飾性」・「象徴性」・「感傷性」の四つに分類しているが、それぞれの特徴を述べる前に、その前提としての日本国土の自然的環境による影響についても詳しく述べ、この自然条件との関連を常に考慮しながら日本美の特質を論じている¹⁰。同じく日本美の特質を研究していたドイツ文学者の鼓常良は、『日本芸術様式の研究』において、「日本の美術は自然愛の芸術である」とし、「自然愛は日本の国民性の著しい特徴であり自然そのものに生活圏を融合させている」と述べている¹¹。また、近代における「日本の美」の発見という点で、文部官僚として音楽取調掛に籍を置いていたこともある美術史家の岡倉天心は、『東洋の理想』や『日本の目覚め』などの大きな功績を残している。「アジアは一つである」という有名な出だしを持つ『東洋の理想』は、東洋の精神性を明らかにすることによって日本の芸術を説いており、岡倉はこの著の中で、「波打つ稲田の水、個性へ導き易い群島の多彩な輪廓、その柔らかな色合の季節の不断の変化〔中略〕これらすべてのものから、日本の芸術の精神をあのやうに和

らげてあるところの、あの柔和な単純さや、あの浪漫的な純粋さが生まれた。そしてこれが、日本の芸術を、支那芸術の単調な幅への偏向や、印度芸術の過度の豊富さへの傾向から、一挙に区別」¹²するものであるとしている。これは例えば、現在でも使われる「瑞穂の国」という心象に通じるものがあるが、このような自然に対する国民性は、日本人の心理に定着したものであると考えられ、歴史社会学者の池上英子は『美と礼節の絆』において、「われわれのこの国に対するイメージ自体も、上手に定型化した、言ってみれば詩的な国土のイメージに深く影響されている。〔中略〕われわれの持つ自然観、国土観はさまざまに深く人工的に分節化されていて、われわれは季節の変わり目ごと、あるいは観光地で、この紋切り型のイメージに合致する風景と出会うとなにかほっとし、かすかな詩興を感じるものだ」¹³と論じ、日本の自然が日本人のメンタリティの中で、型にはまったイメージと化していることを指摘している。

しかし、アンダーソンの「想像の共同体」や、エリック・ホブズボームの「創られた伝統」という言葉が示すように、このような定型化した文化イメージは、近代以降の、言わば「発明」に過ぎないという指摘がなされることがある¹⁴。ならば自然を中心とした「日本の美」というイメージも、明治以降の「創られた伝統」に過ぎないのだろうか。この疑問に対しても池上は同書で結論を出しており、日本における「美のパブリック圏」、すなわち「日本の美」という概念は、江戸時代を通じて全国的に拡大したことを指摘している。同書によれば江戸時代、市場の広がりと共に都市において消費文化が盛んになり、識字率の高さを背景として様々な出版産業が興った。そして、俳諧・貸本・ファッションなどで美を愛でる集まりが民を「横」につないだということだが、身分制・分割統治等の「縦」割型幕藩体制が全国を支配しており、それはプライベートな領域における「弱い紐帯」としてのみ容認された。しかしいずれにせよ、この「ネットワーク革命」によって、民の間に共通した美意識や礼節が育まれたのである。つまり、アントニー・D・スミスが『ネイションとエスニシティ』において、ナショナリズムの根源をエスニックなルーツ—神話や伝説に求めた様に¹⁵、「日本の美」の基礎は既に江戸時代に存在しており、明治政府はそれを利用して「日本の美」を作った、もしくは国民に浸透させたと言えるだろう。このことを念頭に置いた上で、次の章へ移る。

3. 『小学唱歌集』における「自然」

まず、『小学唱歌集』における、「自然」をテーマとした曲のリストを掲載する。

番号、曲名	歌詞テーマ	番号、曲名	歌詞テーマ
1 かをれ	春夏秋冬	35 霞か雲か	春の情景
2 春山	春秋	37 かすめる空	春秋
3 あがれ	鳥、魚(春夏)	38 燕	鳥(春夏)
6 和歌の浦	鳥(万葉集の引用)	39 鏡なす	雪月花
7 春は花見	春秋	40 岩もる水	月
8 鶯	春秋	41 岸の桜	春秋
10 春風	春秋	49 み寺の鐘の音	月
11 桜紅葉	春秋	54 雲	雲
12 花さく春	春秋	55 寧楽の都	春秋
13 見わたせば	春秋	60 秋の夕暮れ	秋の情景
14 松の木陰	春秋	62 秋草	秋の情景
15 春のやよひ	春夏秋冬	64 園生の梅	花(春の情景)
19 閨の板戸	春の情景	66 四季の月	春夏秋冬
21 若紫	春の情景	72 小舟	花
26 隅田川	雪月花	75 春の野	春の情景
28 おぼろ	春秋	78 菊	花(秋)
34 鳥の声	春秋	83 さけ花よ	春の情景

歌詞テーマの分析は筆者によるものだが、直接的な春夏秋冬の言葉が含まれているものや、連ごとに季語が含まれているものを¹⁶、「季節」をテーマにした歌詞に分類している。季節を感じさせないものはほとんどなく、「日本の自然」イコール「季節」という定式化が見てとれる。また、「春秋」と「春夏秋冬」のように、季節の移り変わりをテーマにしたものが全体の半数以上を占めるが、例えばメーソンの『国楽大系』における楽曲歌詞内容を見てみると¹⁷、春や夏など季節の一つをテーマとした歌詞はいくつかの曲で見られるが、連ごとに季節を変え、季節の移り変わりを表現しているものは凡そ見られない。『徒然草』の第十九段では、「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ(季節の移り変わりこそ誠に美しいものである)としているが、ここに『小学唱歌集』歌詞の特徴が見出せる。また、そのような曲の歌詞には、必ずと言って良いほど桜や月、雪などの典型的な季語が含まれているが、このような楽曲は四季を定型イメージ化し、「日本の自然」に関する共通認識を国民に浸透させる役割を果たしたと考えられる。俳人の宮坂静生による研究書『季語の誕生』によれば、雪月花のような主要な題目は平安後期までに成立していたということだが、宮坂はこれを「当時の貴族が想定した共通の規範に基づく共同幻想」¹⁸であると表現してい

る。江戸時代に俳諧が成立し、身分を越えて人々がそれに興じるようになると、身近な生活の素材などからも季語が集められて、その数は著しく増大した。1636年に纏められた野々口立圃による最古の季題集『はなひ草』には590語、1648年の北村季吟による『山の井』には1300語、1803年の曲亭馬琴による『俳諧歳時記』には2600語の季語が集められている。貴族から始まった共同幻想が、時代を経る事に一般の国民層にまで広がり、明治の近代化によって国民全体の共同幻想になったと見なすことができるだろう。

では、音楽取調掛が『小学唱歌集』の楽曲歌詞を広義の「翻訳」によって作成する際、意図的にこれらの季節イメージを後付けした証拠として、4曲の「翻訳唱歌」と、原曲歌詞の正確な翻訳を比較考察してみたい。

第1曲《かをれ》¹⁹

一かをれ、におえ、そのうのさくら、 二とまれ、やどれ、ちぐさのほたる、
三まねけ、なびけ、野はらのすすき、 四なけよ、たてよ、かわせのちどり、

原曲：曲名なし(『国楽大系』における練習曲)²⁰

愛らしい五月よ、愛らしい五月よ、肌寒い風を遠くにやってくれ。

Lovely May, lovely May, drives chilling wind away.

原曲は、メーソン『国楽大系』に掲載されている音階の練習曲。原曲歌詞は一連のみで、春をテーマにしたものだが、唱歌では同じ旋律を四回繰り返し、それぞれの連に春夏秋冬の季語を一つずつ組み込んでいる。

第35曲《霞か雲か》

一かすみか雲か、はたゆきか、とばかりにおう、その花ざかり、ももとりさ
えも、うたうなり、
二かすみははなを、へだつれど、隔てぬ友と、きてみるばかり、うれしきこ
とは、世にもなし、
三かすみてそれと、みえねども、なく鶯に、さそわれつつも、いつしか来ぬ
る、はなのかけ、

原曲：《春の歌》*SPRING-SONG*.²¹

1. 全ての鳥たちが再び来る、再び会いに来る！そして彼らは喜びの歌を張り上げ、囀り、声をふるわせて歌う。愛しき春の幸福な日々、今こそ我々に会いに戻る。

1. *All the birds are come again, Come again to meet us! And a joyous song they raise, Chirpring, trilling merry lays:*
2. 皆なんと陽気なことか、あちこち飛び回っている！ 彼らの歌が私の耳に届き、私は甘い声を聴いたように思う。そなたの望む幸福な一年、祝福して届けよう。
2. *See how gaily one and all, To and fro are springing! As their chanting meets mine ear, Voices sweet I seem to hear, Wishing thee a happy year, Blessings with it bringing.*
3. 彼らが歌で教えてくれること、我々は学ばねばならぬ。木の上の鳥たちのように幸福でいること、喜んで迎えよう、全ての春の帰還を。
3. *What they teach us in their song, We must e'er be learning; Let us ever cheerful be, As the birds upon the tree, Welcoming so joyously, Ev'ry Spring returning.*

唱歌歌詞は音楽取調掛の御用掛である加部巖夫によるもの。唱歌、原曲共に春の季節を歌った内容である。原曲歌詞は「鳥」が情景の全てであるのに対し、唱歌においては「霞」と「花」という春の季語が追加され、「鳥」に関しても鶯という具体的な春の鳥が登場することによって、日本的な春のイメージになった。国語学者の金田一春彦は、唱歌の歌詞を「言い回しや語法がいずれも古風であり、平安期の和歌を思わせる」歌詞と評している²²。

第37曲 《かすめる空》

一かすめるそらに、雨ふれば、草木もともにうるおいぬ、わらえる花、におえる山、類なの、ながめかな、
二山の端はれて、つき清く、ちさとのくまも、かくれなし、きらめく露、なくなるむし、たふいな、秋の夜や、

原曲：《雨》 *THE RAIN*.²³

1. 見よ、はるかあそこの山々に揺れる霧雨。天の泉から平地への祝福の受け渡し。今や育つとき、急ぎ種をまけ！ 地面を良く耕し、豊かな恵みを産む。
1. *See, O'er yonder mountains moves the misty rain, Passing, from heaven's fountains, Blessings on the plain. Now's the time for growing; Quickly, then, be sowing! Let the well-tilled field--- Rich abundance yield.*
2. 豊かだろうが貧しかろうが、どうというのだ？ どちらも善のためにここ

にある。善き種は、喜びのうちに彼に蒔かせる。晴れも曇りも汝らの共有のため。天は祝福をもって、生ける者に与える。

2. *Rich or poor, what matter? Each is here for good: good seeds let him scatter In contented mood. For ye share together, Sunshine and wet weather; Hean'n these blessing gives, To each one that lives.*

唱歌の歌詞は、主に原曲一番の歌詞を当てはめたものと言える。原曲はキリスト教義に基づいたものだが、唱歌では宗教色を取り去り、原曲一番における「霧雨が降り緑が潤う」という情景を拡大している。唱歌二番の歌詞は秋をテーマにしているが、一番も「かすめる(霞める)」という季語から春がテーマだと判る。「春雨」と「秋晴れ」の対比であろう。『小学唱歌集』に、「春夏秋冬」ではなく「春秋」をテーマにした曲が多いのは、二連立ての歌詞が多いからだと推察される。

第38曲《燕》

一こよやこよや、こよつばくらめ、おやもひなも、ひねもすかたり、たのしみし、その巢をいでて、とおき国辺に、たちわかるとも、かえりりこよや、わが宿に、かえりこよや、つばくらめ、
二来なけ来なけ、やまほととぎす、われもひとも、夜はよもすがら、いねもせず、深山をいでて、都のそらに、なけほととぎす、なのれなのれ、わがやどに、きなけきなけ、ほととぎす、

原曲：《来い、来い、可愛い鳥よ》*COME, COME, PRETTY BIRD.*²⁴

1. 来い、来い、可愛い鳥よ、そして私のために歌え、甘いメロディを、喜びと共に聴こう。来い、来て始めよ、私はお前の幸福な気質を学び、そして甘く歌おう、谷と花咲く平野を越えて、私のために歌え、私のために歌え、可愛い可愛い鳥よ。
1. *Come, come, pretty bird, and sing a song for me, I'll listen with pleasure, To your sweet melody. Come, come and begin, I'll learn your happy strain, And wa r ble so sweetly, O'er hill and flowery plain, Sing for me, sing for me, Pretty, pretty bird.*
2. 歌え、歌え、可愛い鳥よ、お前の歌を私は愛して聴く。それは耳で甘くふるえる。来い、来て始めよ、お前の愛らしい翼を項垂れるな、私を見よ、そして甘く甘く歌え、私のために歌え、私のために歌え、可愛い可愛い鳥よ。

2. *Sing, sing, pretty bird, Your song I love to hear; It trembles so sweetly, Upon the list'ning ear. Come, come and begin, Don't droop your pretty wing, But turn your eyes on me, And sweetly, sweetly sing, Sing for me, sing for me, Pretty, pretty bird.*

原曲も唱歌も二連の歌詞。原曲は愛らしい鳥を歌ったものだが、唱歌ではつばめとほととぎすをそれぞれの連に当てはめ、春から夏への移り変わりを表している。「わがやどに來い」や「わがやどにきなけ」など、原曲歌詞と共通するフレーズも見られる。

以上4曲の唱歌歌詞を考察したが、どれも「翻訳」の際に季語が付加されていることがわかる。例えばアントーニオ・ヴィヴァルディの《四季》などは、それぞれの季節を全く異なる音楽で表現しているが、違う季節の歌詞を同じ旋律で歌うということは音楽的に無理があり、『小学唱歌集』に関しては楽曲への批判も多く存在している²⁵。しかし、編纂の意図ということから考えると、『小学唱歌集』は季語を基にした「日本の美」のイメージを創出し、国民間の文化的共通認識を高める役割を担っていたと言えよう。

4. 「翻訳唱歌期」の民間製唱歌集における「自然」

前章では『小学唱歌集』を中心とした分析を行ったが、本章では「翻訳唱歌期」の重要な民間製唱歌集をいくつか対象とし、そこに掲載されている「自然」をテーマとした唱歌歌詞の変遷を考察する。『小学唱歌集』は1884年の時点で全3巻が刊行され、同年以降、実際に各地の小学校で使用が開始されるが、1886年、前年に初代文部大臣となった森有礼が「第一次小学校令」を公布し、それまでの欧化主義の反動とも言える国家主義の勃興の下、教科書検定制度が始まる。これは地方の裁量に任せていたそれまでの認可制と違い、国家が教科書の基準を定めるものであり、「唱歌」においても1888年頃より検定を受けた民間の教科書が見られるようになる。その最初期のものとして、東京高等師範学校教授で国文学者の大和田建樹による『明治唱歌』全6巻が存在する。これは1888年から1892年にかけて、大和田が宮内省雅楽局の奥好義と共に編纂したものだが、ほとんどの歌詞を大和田が手がけている。《故郷の空》など現在でも歌われる曲が存在し、全168曲中116曲が「翻訳唱歌」である。「此書は学校と家庭とを問はず、世の唱歌を誘導して、高尚の域にすすめんとのぞむ熱心より、不完全の謗をうけんもかへりみず、稿を起したるなり」²⁶という前書きから必ずしも小学校

向けの教科書ではないが、第一集の最初にメーソンの肖像画とメーソンへの謝辞が掲載されており、『小学唱歌集』を模したものであると見なされるため、ここで扱う。歌詞だけ見ると大和田の創作詩集に近く、芸術性の高いものが多いが、唐澤の歌詞分類基準を参考にして分析した結果²⁷、五分の一程度が「自然・情景」を歌ったものに分類できる。例えば「なるだけ簡単にて独習にやすき」第一集では2、3、4、5、24、25、26の番号のものが「自然・情景」をテーマにしているが、以下にこれらの歌詞を記述する。

第一集、第2曲《春の歌》

一歌へ歌へ春をむかへて。歌へ歌へ鳥とともに。いざや野も山も歌の声そへて、合はせその訓かへせこだま。空ものどか花もさかり。歌へ歌へ鳥よともよ。
二あそべあそべ野辺の芝生に。あそべあそべ蝶とともに。袖にちる露もけさは心地よや。袖にふく風もけふはうれし。春よ友よこころゆたかに、われとあそべ歌へ。

第一集、第3曲《鳥の歌》

一朝霧はれてさす日のかげ、むかへて親子そらに翔る。たのしさいつもかはらぬ声。歌へや遊べやなつかし鳥よ。
二あるひは雲につばさをのべ、あるひは森にねぐらをとひ、こゝろのまゝに憂もなし。歌へや遊べやむれゆく鳥よ。

第一集、第4曲《春風》

一草葉にふけやはるのかぜ、ひばりの夢をさますまで。菜種のうへをとぶてふの、つかれし羽ねに触れぬほど。
二こずゑにふけやはるのかぜ、花のにはほひをさそふまで。枝さしかはすあをやぎの糸のもつれを見せぬほど。
三ああ愛らしのはるかぜよ、わが身をふきていつまでも、老せぬ空にまひあそべ。若き野山にゆたかよへ。

第一集、第5曲《暮春》

かぜのまにまにちりはててゝ、さくらははやく実になりぬ。ながき春日をいたずらにくららしゝ身こそはかなけれ。

第一集、第24曲《朝雲雀》

一霞にあがれりあはれ朝雲雀。葦のねぐらを早くおきはなれ、むらさき深き
そらに、そのうたかをりわたる。

二雲井になのれりあはれ時鳥。深山の木の間をあとに立ちいでて、月かげき
よきそらに、そのこゑひびきわたる。

三門田におちたりあはれ天つ雁。かさなる海山とほく飛びこえて、うす霧か
かるかたに、そのかげいまぞしづむ。

四波間に操げりあはれ小夜千鳥。ねざめの枕をよそにとひすてて、潮風さむ
きはまにその友ゆききあそぶ。

第一集、第25曲《旅の暮》

一落葉をさそふ森のしぐれ、なみだと散りて顔をうつ。ふるさと遠き旅のそ
ら。ゆきがた知らぬ野辺の路。一夜をたれにやどからん。

二すすきにむせぶ谷のあらし、夕ぐれさむく身にぞしむ。木の間をもるる日
の光。山辺にひびく鐘のこゑ。うれしやあれにやどからん。

三夢にも見ゆるこひしわがや。そなたの空は霧こめて、月影ほそくけむるな
り。なきゆく雁もあときえぬ。あけなばいそぎ文やらん。

第一集、第26曲《二月の海路》

一春のうららの海原や、遠の山々かすむなり。雲か帆影かみづとりの、むれ
てとぶさへおもしろや。

二闇の雲間の星のかけ、光かくれてすごき夜や。やがて嵐かおろしこん、空
のけはひもただならず。

三雨にあらしに大海は、怒涛さかまきあるるなり。いまやわが船かくれ岩に、
ふれてくだけんおそろしや。

四いづこなるらん名もしらぬ、はなれ小島に流れつき、あらしふきやみ春の
夜は、しほぢかすみてあけそめぬ。

最初の12曲が音階の練習曲である『小学唱歌集』と違い、全体的に美感を重視した教科書であろう。題名に「春」を含む第2・4・5曲には、「蝶」、「ひばり」、「春風」、「桜」などの季語が存在するが、季節の移り変わりは見られず、それは全6巻を通じて同じ傾向である。すなわち「四季の定型化」はなく、「高尚の域」という大和田の理念が反映されたものと言える。

1890年、大日本帝国における教育方針を示した「教育勅語」が發布された。これによって徳育の方針が確立されるが、1888年より東京音楽学校長となってい

た伊澤は、同年に国家教育社を設立して「教育勅語」の普及に努める。しかし文部省内でのめ事が原因で1891年に非職となり、以降は公教育における音楽行政から離れてしまう。その後1894年に台湾へ渡り、台湾総督府民政局学務部長心得に就任するが、その前の1892年から1893年にかけて、伊澤は『小学唱歌』全6巻を編纂・発行した。この教科書は伊澤の理想とする忠・孝の徳目を中心とし、智徳の養成と、身体の発育をねらったものだが、「第一巻、第二巻は尋常小学に適用し、第三巻、第四巻は高等小学女生徒に、第五巻、第六巻は高等小学男生徒に適用すべき歌曲」²⁸を掲載している。全158曲のうちの三分の一ほどが純粹な「自然・情景」に関するテーマを持っているが、そのほとんどは第三巻以降に掲載されており、尋常小学校向けの第一・第二巻の楽曲は、「教育勅語」の徳目に沿ったものか祝日大祭日をテーマとしたものが多い。これは文化的な共通意識の創出というよりも、歌詞による直接的な徳育という伊澤の意図が反映されたものと考えられるが、第3巻以降の「自然・情景」をテーマにしたものでは、『小学唱歌集』と同じ路線の歌詞が多く見られる。以下に、いくつか記したい。

第三巻、第6曲《四季の景色》

一山辺にのべに霞み渡り、鶯かはづひばり胡蝶、さくらに梅に春はたのし
二若葉のこずゑ茂りあひて、山時鳥初音もらし、橘かをり夏もをかし
三百草千草匂ひ乱れ、さやけき月に、むしも鳴きて、紅葉に菊に秋もたのし
四霜おく夕べ千鳥鳴きて、こぼるゝ霰つもる深雪、寒くはあれど冬もをかし
五あはれ楽し春も秋も、あはれをかし夏も冬も、あはれあはれ四季のけしき

歌人の佐々木信綱による作詞。旋律はドイツの学生歌である《我々は立派な家を作った》*Wir hatten gebauet ein stattliches Haus*のものだが、歌詞は全く違う。春夏秋冬を1番から4番までの連に当てはめ、それぞれ三つか四つの季語を使用している。

第四巻、第23曲《皇国の四季》

一花杜鵑、過ぎ行けば、月より雪にうつりつゝ、春夏秋も冬もみな、一年ながらあはれなり、ひと年ながらあはれなり
二花には吉野、あらし山、月には明石、須磨の浦。越路のみゆき、夏の富士、みくにゝに多きその所、皇国に多き、其のところ

作詞は音楽取調掛員だった稲垣千穎によるもの。第一連で春夏秋冬の季語を挙げ、第二連では四季の景物に合った風景を描いている。作曲者は不明。

第四卷、第25曲《京の四季》

花咲く春はひがし山、月すむ秋はかつら川、鳥羽田の早苗、小野の雪
みやこにつきぬ、そのながめ

《皇国の四季》と同じく稲垣によるもの。一連のみの歌詞だが、春秋夏冬の順番で京の四季における景物を出している。高野茂の作曲。

ここまで紹介してきた唱歌の歌詞は全て文語によるものだが、1887年から1889年にかけて発表された二葉亭四迷の『浮雲』に端を発する言文一致運動が盛んになってくると、唱歌歌詞においても口語を使用した言文一致唱歌が登場する。その先駆者であるのが《鉄道唱歌》などで知られる、東京音楽学校兼東京高等師範学校助教授の田村虎蔵だが、田村は1900年から1902年にかけて、学習院の納所弁次郎と共に『教科適用 幼年唱歌』を編纂する。この教科書に関し、田村は以下のような緒言を記している²⁹。

- 一 歌曲は、専ら児童の心情に訴へ、程度に鑑み、歌詞は平易にして理解し易く、曲節は快活にして流暢、以て美德感情の養成に資するものを選択せり。殊に尋常科の材料は、主として活潑又は愉悅なる歌曲を選びて、教師の直ちに取りて遊戯と連絡を保たしむるに便せり。
- 一 題目は尋常科にありては、専ら修身、読書科に関係を有する事実、又は四季の風物に因みて之を取り、高等科にありては、更に地理、歴史、理科等、其他の教科に関係を有する事実を選び、以て各教科の統一を完からしめんことに勗めたり。

「歌詞は平易にして理解し易く」というのが言文一致（話し言葉と書き言葉の一致）を示しており、児童には児童の詩があるというのが田村の基本的な唱歌への考え方である。「四季の風物」を題材にして、「児童の心情に訴へ」るような口語の歌詞を付けるというのは、後の童謡運動にも通じるところがあるだろう。全10巻88曲のうち、「修身、読書科、地理、歴史、理科等、其他の教科に関係を有」していない、「四季の風物」をテーマにしているものが14曲あるが、いくつかの歌詞を以下に記す。

初編上巻、第1曲《雲雀》

ひばりは、あがる、てんまでも、さくらは、ちるよ、はるかぜに、ちょう
ちょはまふよ、なのはなに、われらは、あそぶ、はるののに。

初編下巻、第4曲《梅》

一さいたよさいた、うめのはなさいた、さむさにもまけず、ゆきにもおぢず、
きのふは一つ、けさまた二つ、三つ四つ五つ、うめのはなさいた。
二かをるよかをる、うめのはなかをる、てんじんさまの、おすきなうめが、
あちらののべや、こちらのにはに、うぐひすさそふ、うめのはなかをる。

第二編上巻、第1曲《春の野》

一ましろに、みえし、ゆき、きえて、のは、おもしろく、なりにけり。草も、
はえ、木も、めばり、ひばりなき、ちょうも、とぶ。ふくとも、みえぬ、
春かぜを、なびく、やなぎに、しるばかり。
ニいつかと、まちし、花さきて、日も、あたゝかに、なりにけり、とも、さ
そひ、かご、さげて、すみれ、つみ、れんげ、とり、あそぶも、たのし、
春の、のに、ながき、ひかげの、うつるまで。

《雲雀》と《梅》が作詞家の石原和三郎、《春の野》が同じく作詞家の田辺友三郎による作詞。作曲は三曲とも田村による。どの曲も春を歌った歌詞内容だが、「うぐいす」、「うめ」、「ひばり」、「ちょう」などの典型的な春の季語が共通して見られる。また、《梅》と《春の野》は、それぞれ第一連で冬から春への季節の移り変わりが示唆されているが、これは『小学唱歌集』における《霞か雲か》にも見られる手法である。《春の野》は文語で書かれているが、極めて平易であり、田村の緒言に反していない。

以上、教科書検定時代における三種類の民間製唱歌集を見てきたが、この時代の教科書の特徴として、『明治唱歌』の芸術性重視、『小学唱歌』の徳目、『教科適用 幼年唱歌』の言文一致など、編者の意図の違いによる差異がありつつも、官製である『小学唱歌集』をお手本として検定に耐えうるような編纂をしているため、「季語」を中心とした「日本の美」の表現に、必ずしも大きな飛躍はないということが言えよう。

5. まとめ：『尋常小学唱歌』における自然

5-1.

教科書検定制度によって多くの民間製唱歌教科書が誕生したが、教科書疑獄事件を経て1903年に教科書国定化の法案が成立、全国統一の国定教科書が導入された。「唱歌」に関しては国定ではないものの、文部省編集で国定教科書に準

ずる『尋常小学読本唱歌』と『尋常小学唱歌』が刊行された。『尋常小学読本唱歌』は、言わばパイロット版であり、楽曲は全て『尋常小学唱歌』に引き継がれている。『尋常小学唱歌』は、第6学年までの全6冊118曲仕立てであり、文部省著作という信頼を背景に、ほとんどの尋常小学校で使用された。唐澤が第三～六学年の歌詞分析を行っているが³⁰、「自然の風物、季節」に分類されているものに関して、以下にリストを記す³¹。

第三学年	歌詞テーマ	第五学年	歌詞テーマ
1. 春が来た	春	2. 舞へや歌へや	春
4. 青葉	春、木	6. 海	海
6. 汽車	野原、森林、田畑	7. 納涼	夏
7. 虹	夏	9. 鳥と花	春秋
8. 虫の声	秋	12. 日光山	山
9. 村祭り	秋祭(季語なし)	13. 冬景色	冬
12. 雁	秋	第六学年	歌詞テーマ
第四学年	歌詞テーマ	3. 朧月夜	春
1. 春の小川	春	7. 蓮池	夏
6. 藤の花	春	8. 燈台	燈台
9. 雲	雲	9. 秋	秋
13. たけがり	秋	12. 四季の雨	春夏秋冬
14. 霜	冬	15. 新年	正月の情景
18. 近江八景	近江八景	17. 夜の梅	春

『小学唱歌集』と比較して、「季節の移り変わり」をテーマにしていないものがほとんどである。『小学唱歌集』に関しては、歌詞内容を重視して旋律は二の次だったため、「曲と歌詞内容が合っていない曲が多い」という批判を受けがちだったが、『尋常小学唱歌』ではそれを改善して音楽に合わせた歌詞を付けている。例えば現在の音楽科共通教材にもなっている《春の小川》はその典型と言えるだろう。以下に歌詞を記す。

第四学年、第1曲《春の小川》³²

一春の小川はさらさら流る。岸のすみれやれんげの花に、にほひめでたく色うつくしく、咲けよ咲けよとささやく如く。

二春の小川はさらさら流る。蝦やめだかや小鮒の群に、今日も一日ひなたに出でて、遊べ遊べとささやく如く。

三春の小川はさらさら流る。歌の上手よ、いとしき子ども、声をそろへて小川の歌を、うたへうたへとささやく如く。

この曲は、《故郷》で有名な高野辰之と岡野貞一によるものだが、「すみれ」や「れんげ」は春の季語でも、「めだか」は夏の季語である。「春の小川」という言葉から春の情景であることは間違いなく、もはや季語に固執せずに作詞を行っていることが窺える。同じことは《村祭り》でも言えるが、以下に歌詞を記す。

第三学年、第9曲《村祭り》

一村の鎮守の神様の今日はめでたい御祭日、どんどんひやらら、どんひやらら、朝から聞える笛太鼓。

二年も豊年満作で、村は総出の大祭。どんどんひやらら、どんひやらら、夜まで賑ふ宮の森。

三治まる御代に神様のめぐみ仰ぐや村祭。どんどんひやらら、どんひやらら、聞いても心が勇み立つ。

作詞者は不明。「豊年満作」を祝う祭りということで、秋祭りを歌った内容であることが推察されるが、季語は存在せず、『小学唱歌集』にはなかったタイプの歌詞と言えるだろう。

ある意味においては日清・日露戦争を経て、最早ナショナル・アイデンティティの創出が完了しているため、『尋常小学唱歌』では「日本の美」を定型化してわかりやすくすることにこだわらない作詞を行っているとも見なせる。他にも『尋常小学唱歌』には、「翻訳唱歌期」の唱歌で見られた「徳育」や「忠君愛国」、「教科統合」や「平易な歌詞」などの要素が内包されており、明治期唱歌教育のいわば集大成でもある。現在の小学校音楽科共通教材の半数以上がこの教科書から受け継がれた楽曲であり、現代日本への影響も大きい。例えば現代に生きる我々は、日本一の山と聞かれると即座に富士山を連想できるが、日本一の川と問われて同じように信濃川を思い浮かべはしない。これはやはり、『尋常小学唱歌』第二学年に掲載され、音楽科共通教材にもなっている《富士山》の歌詞イメージが影響しているのではなかろうか。前述の「めだか」の季語の件も含め、『尋常小学唱歌』は新しい「日本の美」イメージを創り出したと言えよう。

5 - 2

以上の考察を以て本研究を締めくくる。「季語」をキーワードに、「日本の美」をテーマとして、『小学唱歌集』から『尋常小学唱歌』までの唱歌集をたどって

みたが、本研究の重要な成果として、『小学唱歌集』は「季語」に基づいて文化的アイデンティティを創出する役割を担っていたものであるという分析結果を挙げたい。これは日本の唱歌教育におけるナショナル・アイデンティティが、スミスの言うような「エトニ」から連続していたということでもある。民間製唱歌集に関しては、重要な三編のみを対象とし、教育史の流れに沿って論じたが、頁数の制限もあり、それぞれの詳細な分析を記述できなかったことが悔やまれる。今後の課題として、音楽の面を含めた、それぞれの教科書の更に詳細な分析を行っていききたい。

注

- ¹ 安田寛『仰げば尊し 幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』(株式会社東京堂出版、2015)p.310-360
- ² 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会、1967年)p.81-83
- ³ 唐澤富太郎『教科書の歴史』(創文社、1956) p.135-139
- ⁴ 例として、音楽教育学者の杉田政夫は、『学校音楽教育とヘルバルト主義』(風間書房、2005) P.29において、「忠君愛国的なもの」と「教訓的なもの」だけを、「徳性の涵養」という伊澤の唱歌に対する考えの反映として扱っている。
- ⁵ 『教科書の歴史』 p.139
- ⁶ 『国境の越え方—比較文化論序説』(平凡社ライブラリー、2001)や『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』(新曜社、1995)を参考文献として挙げる。
- ⁷ 川端康成『美しい日本の私』(講談社現代新書、1969) p.36
- ⁸ 同上 p.11
- ⁹ 白居易の詩において、「雪月花」と「四季の美」は同義だが、日本の詩歌における「雪月花」はこの三種の景物そのもの、もしくはそのような景物を愛でる風流さを表す。
- ¹⁰ 矢代幸雄『日本美術の特質』(岩波書店、1965)
- ¹¹ 吉井貞俊『日本美と神道』(新風書房、1999) p.29を参照した。
- ¹² 岡倉天心著、浅野晃訳『東洋の理想』(新学社、2004) p.188
- ¹³ 池上英子『美と礼節の絆』(NTT出版株式会社、2005) まえがき p.ii
- ¹⁴ 日本における例としては、『国境の越え方—比較文化論序説』や鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』(株式会社平凡社、2005)などが挙げられる。
- ¹⁵ アントニー・D・スミス著、須山靖司・高城和義訳『ネイションとエスニシティ - 歴史社会学的考察』(名古屋大学出版会、1996)において、「ネイション」は近代以前の「エトニ」より連続するものであるという説明がなされている。ただし、スミスも「近代化」のインパクトは認めており、「ネイション」と「ナショナリズム」は単なるイデオロギーや政治形態だけでなく、文化的現象としても取り扱う必要があるとしている。
- ¹⁶ 『小学唱歌集』の季語の分析には、同時代に編纂された歳時記である根岸和五郎編『太陽暦四季部類』(山静堂、1878)を使用した。
- ¹⁷ 『国楽大系』の歌詞に関しては、拙稿「国民国家形成期の日本における唱歌教科書に関する一考察 - メーソンの『国楽大系』との比較を通じて」(九州教育学会研究紀要第42巻) p133-140において分類を行っている。
- ¹⁸ 宮坂静生『季語の誕生』(株式会社岩波書店、2009) はじめに p.vi
- ¹⁹ 以下全て、『小学唱歌集』の楽曲は、伊澤修二『洋楽事始』(株式会社平凡社、1971)か

らの出典。

- ²⁰ Luther Whiting Mason, *Second Music Reader* (Boston, 1873) p.7 以下の翻訳は、全て筆者によるもの。
- ²¹ Luther Whiting Mason, *First Music Reader* (Boston, 1870) p.24
- ²² 金田一春彦『日本の唱歌〔上〕』（講談社、1977） p.39
- ²³ *Second Music Reader*, p.49
- ²⁴ B.Bradbury, *Flora's Festival*, (New York, 1847) p.16-17
- ²⁵ 例として『音楽界 第一巻 第四～十号』（大空社、1908）には『小学唱歌集』を中心とした唱歌教育への様々な批判と要望が掲載されている。以下に主たるものを記しておく。
- ・古語体を改め、理解しやすい平易な文体とするべき。
 - ・小学校における国語科程度を考慮し、その内容はなるべく諸学科に関連するもの、あるいは四季に適応している自然物の事物より取り入れるべき。
 - ・曲想と歌詞およびその内容と一致させるべき。
 - ・簡単明瞭で、直ちに歌詞の内容を想起させるものにするべき。
- ²⁶ 大和田健樹『明治唱歌第1集』（中央堂、1888）より。以下、楽曲の出典も同書籍から。
- ²⁷ 唐澤の歌詞分類基準については拙稿「唱歌の歌詞分析と思想的背景の考察：唐澤富太郎の『小学唱歌集』歌詞分類を中心として」（熊本大学教育実践研究 32） p.69-75 で考察を行っている。
- ²⁸ 伊澤修二『小学唱歌』（大日本図書株式会社、1892-93）より。以下、楽曲の出典も同書籍から。
- ²⁹ 田村虎藏『教科適用 幼年唱歌』（十字屋、1900-1902）より。以下、楽曲の出典も同書籍から。
- ³⁰ 『教科書の歴史』 p.326-329
- ³¹ 『尋常小学唱歌』の歌詞内容分析については、同時代の歳時記である服部耕石編『季題辞典』（大東社、1907）を使用した。
- ³² 以下、歌詞の出典は『尋常小学唱歌』（文部省編集、1911-1914）より。

主要な参考文献

- ・唐澤富太郎『教科書の歴史』（創文社、1956）
- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、1967年）
- ・川端康成『美しい日本の私』（講談社現代新書、1969）
- ・金田一春彦『日本の唱歌〔上〕〔中〕〔下〕』（講談社、1977-1982）
- ・吉井貞俊『日本美と神道』（新風書房、1999）
- ・池上英子『美と礼節の絆』（NTT出版株式会社、2005）
- ・杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』（風間書房、2005）
- ・宮坂静生『季語の誕生』（株式会社岩波書店、2009）

[The Japanese Beauty in the Words of School Songs: The National Identity from Season Words in the Meiji Period]

[Sato, Keiji · 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程]